

付 帯 状 況 と 逆 接

江 原 由 美 子

1 はじめに

現代日本語の接続助詞ナガラには、〈付帯状況〉と〈逆接〉の二つの用法が見出される*¹。〈付帯状況〉とは、(1)(2)のように、主節の事態に付随してナガラ節の事態が生起することを表すものである。この用法は、ナガラ節の事態と主節の事態が同時並行的に進行するので、〈同時進行〉と呼ばれることもある。また〈逆接〉とは、(3)(4)のように、ナガラ節の事態から期待される事態に反することが主節の事態となっているもので、ナガラ節の事態と主節の事態が相反することを表すものである。

- (1) 新聞を読みながらご飯を食べる。
- (2) 泣きながら空を見上げた。
- (3) 知っていながら教えてくれない。
- (4) まだ若いながらしっかりしている。

この二つの用法は、意味の上からだけではなく、前接語によっても分類されることが従来指摘されている。〈付帯状況〉を表すナガラには動詞連用形、〈逆接〉を表すナガラには動詞連用形、形容詞連体形、形容動詞語幹、助動詞ナイなどが前接する。〈付帯状況〉と〈逆接〉を表すナガラには、共に動詞連用形が前接するが、先行研究では、意志的な継続動作の動詞が前接すれば〈同時進行〉(本稿の〈付帯状況〉)、無意志性の動詞が前接すれば〈逆接〉(森田良行(1980))、前接する事態が動作性であれば〈同時進行〉(本稿の〈付帯状況〉)、状態性であれば〈逆接〉(森田良行(1980))、ナガラ節のアスペクトが「継続」であれば〈同時進行〉(本稿の〈付帯状況〉)、「パーフェクト」であれば〈逆接〉(和田礼子(1998))などの指摘がなされている。しかし、なぜ前接語の違いによってナガラが〈付帯状況〉となったり〈逆接〉となったりするのかは明らかになっていないように思われる。

また、(1)～(4)のナガラにモを付加してナガラモとすると、次のようになる。

- (5) 新聞を読みながらもご飯を食べる。
- (6) 泣きながらも空を見上げた。
- (7) 知っていながらも教えてくれない。

(8) まだ若いながらももしっかりしている。

〈逆接〉を表す(3)(4)のナガラをナガラモにした(7)(8)は、ナガラモ節の事態から期待される事態に反することが主節の事態となっており、(3)(4)と同じく〈逆接〉を表すと考えられる。しかし、〈付帯状況〉を表す(1)(2)のナガラをナガラモにした(5)(6)は、意味が〈付帯状況〉から〈逆接〉へと傾いている。ナガラ文の(1)(2)では、主節の「ご飯を食べる」「空を見上げる」という事態に付随して、ナガラモ節の「新聞を読む」「泣く」という事態があることが述べられている。一方、ナガラモ文の(5)(6)では、主節の事態に付随してナガラモ節の事態があることが述べられているという点ではナガラ文の(1)(2)と同じだが、それだけではなく、主節とナガラモ節の二つの事態は本来同時には生じないはずだというニュアンスが付加されている。

ナガラモが〈逆接〉の用法に傾くということは、先行研究でも指摘されている。例えば、田中章夫(1977)は「ナガラ」「ツツ」は、係助詞「も」を伴うと、完全な逆説の接続助詞に転化する」とし、森田良行(1980)は、「ながらも」の形はいつも逆接となる」、中川良雄(1988)は「ながら」が並行の意味を持つためには、[+動作]アスペクトの動詞、および telic situation に接続しなければならないが、その場合でも、係助詞「も」を伴うと、完全に逆接の意味に転化してしまう」としている。また、佐藤直人(1997)は、ナガラの前接語が付帯状況と逆接の両方の意味を取り得る非状態述語において、「副助詞モを付置すると逆接のよみが強制される」とし、松田真希子(2000)は、必ず逆接の読みになるものの典型としてナガラ+副助詞モを挙げている。甲田直美(2001)も、「現代語「ながら」は、同時進行の動作と逆接の両方の関係を担えるが、「ながらも」と、「も」がついた場合には、同時並行は表さず、添加的逆接が多い」(p50)としている。しかし、先行研究ではナガラモが〈逆接〉に傾くという現象の指摘しかなされておらず、そのようなことが起きる理由については明らかにされていない。

本稿では、〈付帯状況〉と〈逆接〉に関わる以上の問題点について、考察を行う。前者については、2節でナガラ節と主節の事態の関係から論じ、後者については、3節でナガラモの構文的特徴から解決をはかりたい。また、4節において、ナガラ文とナガラモ文の関係を明らかにするために、ナガラモが非文となる例を挙げ、その理由について言及する。

2 ナガラ の 〈付帯状況〉 と 〈逆接〉

先にも述べたように、先行研究では、前接語の違いによってナガラが〈付帯状況〉になるか〈逆接〉になるかが決まるとされ、その基準としては、前接する動詞が意志的か無意志的か、動作性か状態性か、そのアスペクトが継続かパーフェクトかといったことが挙げられて

いる。しかし、形容詞や形容動詞語幹、助動詞ナイといった状態性述語が〈逆接〉のナガラにしか前接しないことを考慮すれば、〈付帯状況〉と〈逆接〉のナガラを分かつ特徴として最も重視すべきことは、前接語が動作性か状態性かということではないかと思われる。

ナガラ文の主節を「テレビを見る」とした場合、ナガラ節には(9)のように述部が動作性であるものも、(10)のように状態性であるものも来得る。(9)は主節の事態に付随してナガラ節の事態が生起することが示されており〈付帯状況〉、(10)はナガラ節から期待される事態に反することが主節の事態となっており〈逆接〉を表すものと考えられる。

(9) |歩き／話をし／ラジオを聞き| ながらテレビを見る。

(10) |犬であり／寝る時間は過ぎてい／仕事が残ってい| ながらテレビを見る。

このようにナガラ節には種々の事態が来得るが、ナガラ節に来る事態に制限がないわけではない。次の(11)(12)は、(9)(10)のナガラ節の事態とは逆となるような事態をナガラ節の事態として想定したものである。これらはすべて不自然な文となっている*²。

(11) |*立ち止まり／*黙り／*集中し| ながらテレビを見る。

(12) |*人間であり／*起きている時間であり／*仕事が終わって| ながらテレビを見る。

なぜ(9)(10)は言えて(11)(12)は言えないのかと言うと、(9)(10)は「テレビを見る」という主節の事態からは、同時並行的に生起することが容易に予測され得ない事態がナガラ節の事態となっているのに対し、(11)(12)は主節の事態から予測され得る事態がナガラ節の事態となっているという違いがあるためだと考えられる。(11)では、「テレビを見る」と同時に「立ち止まる」「黙る」「集中する」という動作や状態、(12)では、「テレビを見る」という動作が行われる時の状態として当然のものと考えられる、「人間である」「起きている時間である」「仕事が終わっている」という状態がナガラ節に示されている。そのような、言わば主節の事態と重なる動作や主節の事態に内包される状態を、あえて付随する事態としてナガラ節に切り出して示そうとしたために、これらの例は不自然となっているのではないだろうか。

またナガラ文では、「歩きながら走る」「飛びながら泳ぐ」「猫でありながら犬である」「小さいながら大きい」といった、そもそも同時並行的に生起することが不可能なものは非文となる。そして、「田中が走りながら佐藤が歩いた」「山田が泣きながら鈴木が笑った」のように、同時並行的に生起はしても、ナガラ節が主節の事態に付随する事態でない場合には非文となる。つまり、ナガラ節の事態は、主節の事態に付随して同時並行的に生起することが可能でありながら、その生起が主節の事態から容易に予測され得ない事態でなくてはならないと言える。

ここで、ナガラの前接語が動作性の場合、つまりはナガラ節が動的な事態の場合を考える

と、主節の事態に付随して同時並行的に生起することが可能で、主節の事態からは容易に予測され得ない動的な事態には、色々な種類のものが無数にあると思われる*3。それらのナガラ文は、ある事態に付随して別の動的な事態が生起する〈付帯状況〉を表す文となる。「昼間働きながら夜学校へ通う。」(倉持保男(1971))のように、〈付帯状況〉とも〈逆接〉とも取れる文もあるが、これは、ナガラ節の事態と主節の事態の間に語彙的な対立(「昼間」と「夜」、「働く」と「学校へ通う」)があるために、〈逆接〉の読みが可能となっているのだと思われる。

一方、ナガラの前接語が状態性の場合、つまりはナガラ節が状態的な事態の場合を考えると、主節の事態に付随して同時並行的に生起することが可能で、主節からは容易に予測され得ない状態というのは、主節の事態やその事態が行われる時の状態に相反するものしか有り得ない。例えば、主節の事態が「酒を飲む」であった場合は、そこから予測可能な「二十歳以上である」「酒が好きだ」「酒を飲める体質だ」といった事態はナガラ節には来ることができず、それとは逆の「十九歳以下である」「酒が嫌いだ」「酒を飲めない体質だ」といった事態がナガラ節となる。そのため、ナガラ文は〈逆接〉を表す文となる。

以上のように、ナガラの前接語が動作性か状態性かで〈付帯状況〉と〈逆接〉という意味の差が生じるのは、ナガラ節の事態が主節の事態に付随して同時並行的に生起することが可能な事態で、主節の事態からは容易に予測され得ない事態でなくてはならないからであると考えられる。

また、〈付帯状況〉を表すナガラには、〈逆接〉とは言わないまでも、本来同時に行うべきではないことを同時に行っているというニュアンスが生まれることがある。例えば、「新聞を読みながらご飯を食べる」「音楽を聞きながら勉強する」では、「ご飯を食べる」こと、「勉強する」ことに集中しなくてはならないのに、同時に「新聞を読む」こと、「音楽を聞く」ことを行っているのはだらしない、不真面目であるというニュアンスが生じている。このような、いわゆる「ながら族」のニュアンスが感じられることがあるのも、ナガラが同時並行的に生起することが容易に予測され得ない事態を結びつけていることによるのではないかとと思われる。

3 ナガラモの機能

ナガラモは1節でも述べたように、先行研究では〈逆接〉とされることが多い。しかし、江田すみれ(1985)は、ナガラモは「逆接というより態度の留保」を表すとし、「一方では前件で述べる判断や感情があるが、他方それと全面的には一致しない考え方もある、ということを表す。前件と後件の重なり具合によっては「も」をとると同時進行ともとれる。」と指摘している。また、春名万紀子・新村朋美(1999)は、「彼女は、雨にぬれながら(も)、

テニスをしている。」という例を挙げ、「も」があっても、〈逆接〉の意味合いは薄いように思われる」と述べている。そして、「文脈次第で〈逆接〉と〈同時進行〉のいずれの解釈も可能」だと考えられる例「胃がんで半年の命と知らされた主人公が、苦悩しながら、「生きる」ことを見つめ直し、残りの日々を公園づくりにかける話だ。」「夢ハ他愛モナイモノトハ思イナガラモヤハリ気ニカカルモノ。」を挙げ、「〈同時進行〉と〈逆接〉は全く別のものではなく、文脈上の意味関係でいずれかの解釈に傾くということであり、「も」によって前件の事態・状況を強調しようとする発話者の意図は、〈逆接〉の場合により多く見られるということではないのだろうか。」と述べている。

以上の先行研究の指摘から、ナガラモには〈逆接〉の意味合いが薄く、〈付帯状況〉と取るべき例もあると考えられる。しかし、それでも、大多数のナガラモが〈逆接〉を表すものや、〈逆接〉に傾いているものであることは否定できない。では、ナガラモはなぜ〈逆接〉に傾いてしまうのだろうか。本節ではこの問題について、ナガラモの構文的特徴から考察を行う。

ナガラモの前接語には、ナガラと同じく、動詞連用形、形容詞連体形、形容動詞語幹、打消の助動詞ナイなどが見られる。ナガラには動作性の語が前接するものは〈付帯状況〉、状態性の語が前接するものは〈逆接〉を表すという違いが見られるので、ナガラモにおいても前接語が動作性か状態性かで分けて考えることにする。

動作性の語が前接する場合には、ナガラモ節の事態は多回的であることが多い*4。次の(13)(14)は、波線部「毎日」「何度も、何度も」から、ナガラモ節の「(学校に)通う」こと、「そんなことをする(＝強く頭部を壁に叩きつける)」ことが多回に行われたことが示されている。これらの例では、主節の「とりとめのない思いがしていた」「いっそのこと「彼」のいるマンションの近くまで行き、せめて「彼」の意識を遠くからでも感応していようか、などと考えている」という事態と同時並行的に、ナガラモ節の多回的な事態が生起していることが示されている。

- (13) どこの学校でも新入生がそうであるように、私は毎日新鮮な気持で通いながらも、とりとめのない思いがしていた。(金閣)

- (14) 「彼」のことを頭から追い出そうとして七瀬は泣きながら強く頭部を壁に叩きつけた。
何度も、何度も、全身の力をこめて叩きつけた。だが、そんなことをしながらも、いっそのこと「彼」のいるマンションの近くまで行き、せめて「彼」の意識を遠くからでも感応していようか、などと考えている自分に気がついてかっと逆上し、お前はまだこりないのか、これでもか、これでもかと口走り、わあわあ泣きながらさらに強く壁に頭を叩きつけるのだった。(エディ)

次の(15)(16)も、波線部「見まい見まいと」「どうにか」から、ナガラモ節の「思う」「風に吹きとばされる」という事態が多回的であることが示されている。これらの例では、多回的なナガラモ節の事態を経て、「つい見る」「風の強い領域を突破できた」という主節の事態に到達したことが述べられている。

(15) こういう説教の間にも、時々丑松は我を忘れて、熱心な眸をお志保の横顔に注いだ。さすがに人目を憚って見まい見まいと思ひながらも、つい見ると、仏壇の方を眺め入ったお志保の目付の若々しさ。(破戒)

(16) 加藤は岩陰に西風をさけてひといきついた。風に吹きとばされながらも、どうにか風の強い領域を突破できたことが嬉しかった。(孤高)

また、ナガラモ節の多回性は、主節の事態が多回的であったり複数のであったりすることから導かれる場合もある。次の(17)では、主節の「荷拵えをしている小使のところへ何か云いつけに立って行く」という事態は、波線部「ときどき」から複数回の事態であることが分かる。ナガラモ節の「私と話をする」という事態は、主節の事態によって複数回中断されながら続けられている事態であり、結果的に多回性を持つに至っていると言える。同様に(18)も、主節に「カウンターの中で珈琲を沸かす」「ジュースを作る」「モーツァルトの曲が終わるたびに、慌てて別のレコードをかけに行く」という複数の事態が示されており、それと同時に並行的に進行する「ひとりで窓辺の席に坐っている私を気にする」というナガラモ節の事態は多回的であると言える。

(17) あす教会を閉して、すぐ松本へ立つとか云う事で、神父は私と話をしながらも、ときどき荷拵えをしている小使のところへ何か云いつけに立って行ったりした。(風立)

(18) 珈琲もいいお味でしたし、御主人のお人柄に好感がもたれて、私はそれから二、三日して、また「モーツァルト」に行きました。その日はお客様が多く、御主人は、ひとりで窓辺の席に坐っている私を気にしながらも、カウンターの中で珈琲を沸かし、ジュースを作ったり、モーツァルトの曲が終わるたびに、慌てて別のレコードをかけに行ったりで、とても忙しそうでした。(錦繡)

以上のように、動作性述語が前接する場合には、ナガラモ文の前件の事態は多回的なものとなることが多い。これは、モという形態によると考えられる。モは他にも同類のものがあることを提示する累加の機能を担うが、ナガラモ文には、その機能が従属節の事態が多回的であることを示すものとして、引き継がれているのではないだろうか。

ところでナガラ文では、ナガラ節の事態は主節の事態に付随して生起する事態であり、主たる事態として示されているのは、あくまで主節の事態である。しかし、モが付加されたナ

ガラモ文では、ナガラモ節が多回的となっているために、主たる事態として示されている主節の事態と同等の事態として、ナガラモ節の事態が格上げされているのではないと思われる。前節で述べたように、ナガラ文では、ナガラ節の事態は、主節の事態に付随して同時並行的に生起することが可能な事態で、主節の事態からは容易に予測され得ない事態である。そのような事態が、主節に付随する事態ではなく、主節と同等の事態として格上げされて提示されてしまうと、同時に生起することが予測され得ないという対立性が鮮明になり、〈逆接〉に傾いてしまうのではないだろうか。

次に前接語が状態性の場合であるが、その機能がナガラモに影響を及ぼしているということは、前接語が動作性の場合と同じであると考えられる。しかし、ナガラモ節の事態が状態性のものである場合、その状態を分断したり複数にしたりして多回的にすることはできない。状態性の述語が前接する場合は、それはナガラモ節の事態が質的に甚だしいものであることを示すという働きを担っていると考えられる。例えば(19)では、「知識のある者は理解した上で」「年少の者はすなおに受けとめて」という状況から、「老齢の者はよくわからない」という事態が、主節の「感心した」という事態を導く上で質的に甚だしいものであることが示されている。また(20)では、「小さい」というナガラモ節の事態自体が質的な甚だしさを示している。このような状態性述語が前接する場合は、ナガラモ節の事態が質的に甚だしい事態として主節と同等に格上げされることによって、〈逆接〉のニュアンスが強化されているのではないと思われる。

(19) 知識のある者は理解した上で感心し、年少の者はすなおに受けとめて感心し、老齢の者はよくわからないながらも感心した。(人民)

(20) 入江には小さいながらも舟着場らしいものがあり、砂浜に三、四隻の漁船が引き揚げられています。(沈黙)

4 ナガラモ文の成立要件

ナガラモとナガラは、構文的に似た環境にある。前接語に違いは見られず、従属節と主節との時間的順序関係も、同時か先行一後続で同じである。しかし、ナガラを常にナガラモに置き換えることができるかと言うと、そうではない。

(21) 歩きながら／*歩きながらも 話しましょう。

(22) テレビを 見ながら／*見ながらも 手を動かせ。

(23) 内藤のシャドー・ボクシングを 見ながら／*見ナガラモ、私は奇妙なことに気がついた。私が内藤の練習姿を見るのはこれが初めてだということだ。(一瞬)

(24) 「真面目にやっとなるか？」父が害虫をかみ潰したような顔で、コーヒーを 飲みま

がら／?? 飲ミナガラモ| 言った。(女社)

このうち(21)(22)は、主節のモダリティ制限に関わるものである。先行研究では、〈付帯状況〉を表すナガラ文には主節のモダリティに制限はないが、〈逆接〉を表すナガラ文には主節に意志や命令の表現が現れないという制限があることが指摘されている(南不二男(1993)、春名万紀子・新村朋美(1999)など)。例えば次の(25)は、「ご飯を食べる」という事態に付随して、同時並行的に「考え事をする」という事態が進行していることを表しており、ナガラは〈付帯状況〉を表すと考えられる。(26)は、「知らない」という事態から期待される事態に反することとして主節の「知った振りをする」という事態があり、ナガラは〈逆接〉を表していると考えられる。ナガラが〈逆接〉を表す(26)では、主節に意志を表すシヨウや命令を表すシロが現れると非文となるが、ナガラが〈付帯状況〉を表す(25)では、主節にそのような表現が現れても非文とならない。

(25) 考え事をしながらご飯を |食べる／食べヨウ／食べロ|。

(26) 知らないながら知った振りを |する／*シヨウ／*シロ|。

この(25)(26)のナガラをナガラモに置き換えると、(25')(26')のようになる。主節のモダリティに制限がなかった〈付帯状況〉のナガラも、モを付加してナガラモにすると制限が生じることが分かる。つまり、ナガラモ文ではどのような場合においても、主節のモダリティに意志や命令の表現が現れないという制限が見られるのである*5。

(25') 考え事をしながらもご飯を |食べる／*食べヨウ／*食べロ|。

(26') 知らないながらも知った振りを |する／*シヨウ／*シロ|。

また、(23)(24)は、ナガラモ節が多回的になったために文が不自然となってしまった例である。(23)は、主節の「奇妙なことに気がつく」という事態は一回的であり、それを結果として導く「内藤のシャドー・ボクシングを見る」という従属節の事態も一回的でなくてはならない。しかし、ナガラをナガラモに換えると、従属節の事態が多回的になってしまい、「見て気がつく」という一連の動作が成り立たなくなってしまう。そのため、不自然となっているのだと考えられる。(24)は、「コーヒーを飲む」という動作は、幾度もの中断を挟んで行われる断続的な動作だと言える。つまり、ナガラにモを付加して多回的にするまでもなく多回的な動作であるため、それを多回的なものとして表現することには不自然さが伴うのだと考えられる。

5 まとめ

本稿では、付帯状況と逆接に関わる問題に関して、次のことを述べた。

・ナガラ節の事態は、主節の事態に付随して同時並行的に生起することが可能で、主節の

事態からは容易に予測され得ない事態でなくてはならない。ナガラが前接語によって〈付帯状況〉を表したり〈連接〉を表したりするのは、予測され得ない事態となるものの範囲が前接語によって異なるためである。

- ・ナガラモが〈連接〉に傾くのは、モが担う累加の機能によって、ナガラモ節の事態が多回的、もしくは質的に甚だしい事態となってしまう、主節に付随する事態から主節と同等の事態へと格上げされてしまうからである。
- ・ナガラとナガラモは構文的に似た環境にあるが、すべてのナガラにモを付してナガラモ文を作るわけではない。ナガラモ文には、前件が多回的であることによる制限が見られる。

モが付加されることによって〈連接〉に傾くという現象は、同じく〈付帯状況〉を表すツツにも見出すことができる。

(27) 新聞を読み |つつ／つつも| ご飯を食べる。

(28) 「僕はどうすればいいのかな?」「注意するんですね。注意し |つつ／ツツモ| 休養をとる。仕事は当分キャンセルして下さい。そして何かあったら我々にすぐ連絡して下さい。電話は使えますか?」(世界)

また、連接を表す接続助詞には、現代語・古代語を問わずモが付加された形式が多い(トモ、トイフトモ、ドモ、トイヘドモ、ケレドモ、テモ、トイッテモなど)ことは周知の事実である。モとその形式の連接のあり方がどのように関わるのか、モが付加された形式と付加されていない形式とでその連接性にどのような違いがあるのかについては、今後の課題としたい。

注

- *1 残念ナガラ、不本意ナガラといった、価値判断の副詞や評価成分とされる「ーナガラ」は、ナガラが〈連接〉を表す接続助詞として分出されることもあるが、本稿では「ーナガラ」全体で一語と捉え、考察対象には含めない。
- *2 (11) の「立ち止まりながらテレビを見る」は、「~~一度も~~立ち止まりながらテレビを見る」のように、「立ち止まる」が繰り返しの動作であれば非文とはならない。また、(12) の「仕事が終わっていながらテレビを見る」は、仕事内容として「テレビを見る」ことがある場合には許容される。
- *3 ただし、三宅知宏(1999)が「ナガラ節は、その節中に生起する述語が、主節の述語より時間幅のある【過程】を持つと解釈される場合に、付帯状況文として成立する」と指摘しているように、「(電気が一つしかない場合に)電気をつけながら考え事をする」「テレビを消しながら歯を磨く」といった、主節の事態は時間的に幅があるが、ナガラ節の事態は瞬間的に終わるような場合は、非文となる。
- *4 〈付帯状況〉を表すナガラは、「新聞を |読みながら／*読ンダママ| ご飯を食べる」のようにタママで置き換えることができない「過程」を表すものと、「|泣きながら／泣イタママ| 空を見上げた」のようにナガラをタママで置き換えることができる「維持」を表すものとに細分化され

るが、「維持」を表すナガラ文をナガラモ文にしたものは、前件の事態を多回的なものとは捉えがたい。後述の状態性述語が前接するものと同様に、前件の事態は質的に甚だしいものとなっていると考えられる。

- *5 同じモダリティ表現でも、禁止や推量の表現は許容される。これは、禁止や推量の表現はナガラモ文全体にかかっていくためだと考えられる。

(25'') [考え事をしながらもご飯を食べる] |ナ/ダロウ|。

(26'') [知らないながらも知った振りをする] |ナ/ダロウ|。

参考文献

- 江田すみれ (1985) 「逆接の「ながら」の意味と用法について」『ILT NEWS』78
倉持保男 (1971) 「ながら」『日本文法大辞典』松村明編、明治書院
グループ・ジャマシイ (1998) 『教師と学習者のための日本語文型辞典』くろしお出版
甲田直美 (2001) 『談話・テキストの展開のメカニズム—接続表現と談話標識の認知的考察—』風間書房
佐藤直人 (1997) 「日本語のナガラ節の意味と位置の相関」『言語科学論集』1
田中章夫 (1977) 「助詞 (3)」『岩波講座日本語 7 文法Ⅱ』岩波書店
中川良雄 (1988) 「「ながら」の意味と機能—動作の「並行」を表す場合—」『京都外国語大学研究論叢』31
春名万紀子・新村朋美 (1999) 「逆接の「ながら」再考」『講座日本語教育』34
前田直子 (1993) 「逆接条件文「～ても」をめぐる」『日本語の条件表現』益岡隆志編、くろしお出版
松田真希子 (2000) 「ナガラ節の状態修飾性をめぐって」『日本語・日本文化研究』10
南不二男 (1993) 『現代日本語文法の輪郭』大修館書店
三宅知宏 (1995) 「～ナガラと～タママと～テ—付帯状況の表現—」『日本語類義表現の文法 (下)』宮島達夫・仁田義雄編、くろしお出版
三宅知宏 (1999) 「日本語の付帯状況文」『国文鶴見』34
陸宗均 (2001) 「「P ナガラ Q」節の意味と機能」『日本語・日本文化研究』11
森田良行 (1980) 『基礎日本語 2』角川書店
和田礼子 (1998) 「逆接か同時進行かを決定するナガラ節のアスペクトについて」『日本語教育』97

用例出典 (記述のないものは作例)

(一瞬) 『一瞬の夏』沢木耕太郎／(エディ) 『エディプスの恋人』筒井康隆／(女社) 『女社長に乾杯!』
赤川次郎／(風立) 『風立ちぬ・美しい村』堀辰雄／(金閣) 『金閣寺』三島由紀夫／(錦織) 『錦織』
宮本輝／(孤高) 『孤高の人』新田次郎／(人民) 『人民は弱し官吏は強し』星新一／(世界) 『世界の終りとハードボイルド・ワンダーランド』村上春樹／(沈黙) 『沈黙』遠藤周作／(破戒) 『破戒』
島崎藤村…以上、新潮文庫の100冊 CD-ROM

(えはら ゆみこ 岡山大学大学院文化科学研究科)